

令和8年8月20日

草津市議会
議長 遠藤 覚 様

草津市議会 みらいと維新の風
会長 田中 詩織

草津市議会会派「みらいと維新の風」 福島県・山形県行政視察報告書

1. 視察の概要

- 視察日：2026年7月15日～17日
- 視察先：
 1. 福島県浪江町立請戸小学校（震災遺構）
 - 7月15日（水）14時半～15時半
 2. 福島県双葉町 東日本大震災・原子力災害伝承館
 - 7月15日（水）16時～17時
 3. 福島県南相馬市 福島ロボットテストフィールド
 - 7月16日（木）10時～11時
 4. 南相馬市立中央図書館
 - 7月16日（木）12時～13時30分
 5. 福島県南相馬市産業創造センター Zip Infrastructure（Zippar）見学
 - 7月16日（木）14時～16時
 6. 山形県山形市
シェルターインクルーシブプレイス コパル（山形市南部児童遊戯施設）
 - 7月17日（金）9時半～11時
- 視察者：草津市議会会派「みらいと維新の風」
田中詩織・八木良人・野村友子・藤本晶
- 目的：

東日本大震災および原子力災害からの復興と、災害の記憶・教訓を継承する取組を学ぶ。あわせて、都市型自走式ロープウェイ「Zippar」の実機・試験線の見学と試乗を通じて、次世代交通としての特徴や導入可能性、地域交通の課題への活用について調査する。 ロボット技術、インクルーシブな遊び場のPFI事例を調査し、草津市の防災、地域交通、公共施設整備、市民協働の政策立案に生かすことを目的とする。

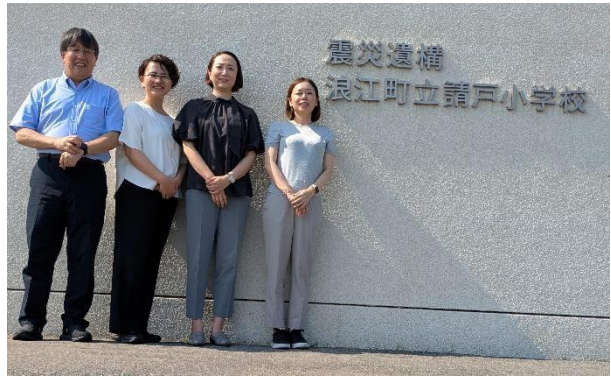
2. 1 日目（2026年7月15日）

◎福島県浪江町立請戸小学校（震災遺構）

7月15日（水）14時30分～15時30分

【概要】

請戸小学校は海岸から約300mに位置し、2011年3月11日の東日本大震災では巨大津波に襲われた。校舎内には津波の威力をそのまま残す倒壊した壁や流された設備、積み重なった機器などが保存されており、自然災害の凄まじさを肌で感じることができた。



一方で、震災当日、校長先生の迅速な判断により児童・教職員は大平山へ避難し、その後、通りかかった運送会社のトラックで役場まで移動したことで、児童全員が無事に避難することができた。

施設内には、震災当日の時系列や教職員の判断、児童の証言などが展示されており、「災害の恐ろしさ」と「命を守るための判断」の両方を学ぶことができる震災遺構であった。

【草津市への示唆】

今回の視察を通して、災害時にはマニュアルだけではなく、現場で状況を判断し、命を最優先に行動することの重要性を改めて感じた。

草津市においても、

- 学校ごとの避難経路や避難場所が、本当に安全かを定期的に検証すること
- 教職員が迷わず避難を決断できる訓練や体制づくり
- 保護者への引き渡しよりも、まず命を守る避難を最優先とする共通認識の徹底
- 地域住民や事業者との連携など、災害時に助け合える関係づくり

が重要であると感じた。

また、近年は豪雨や線状降水帯など自然災害が頻発しており、「自分の地域では起こらない」という思い込みを持たず、日頃から避難行動を考えることの必要性を強く認識した。

◎福島県双葉町 東日本大震災・原子力災害伝承館

7月15日（水）16時～17時



【概要】

東日本大震災・原子力災害伝承館では、地震、津波、福島第一原子力発電所事故という複合災害の記録と教訓が、実物資料や証言映像等を通して伝えられている。2011年3月11日、津波により発電所の電源や冷却機能が失われ、1～3号機で炉心損傷・溶融が発生し、水素爆発へと至った。

事故は一つの機器の故障ではなく、電源喪失から状況把握、制御、冷却の機能が連鎖的に失わ

れたシステム全体の崩壊であった。現在も燃料デブリの冷却に伴う汚染水が発生しており、ALPSで処理した水を基準以下に希釈して海洋放出している。安全性の確認に加え、継続的な監視と丁寧な情報発信の重要性を学んだ。

【草津市への示唆】

草津市においても、停電、浸水、通信障害、道路寸断、人員不足が同時に起こる複合災害を想定し、非常用電源や燃料、代替通信手段などを実際に使える状態で確保する必要がある。また、草津市は、原子力災害時の県内広域避難について、受入先の候補として中心的に協議する自治体に位置付けられている。（令和7年3月「原子力災害に係る滋賀県広域避難計画」策定）このことから、受入施設や要配慮者支援、長期避難への対応を具体化するとともに、災害の記録を防災教育や職員研修に生かすことが求められる。

3. 2日目（2026年7月16日）

◎福島県南相馬市 福島ロボットテストフィールド

7月16日（木）10時～11時

【概要】

福島ロボットテストフィールドは、東日本大震災および原子力災害からの産業復興を目指す「福島イノベーション・コースト構想」の中核拠点として整備。陸・海・空のフィールドロボットの開発実証拠点であり、約50ヘクタール（東京ディズニーランドとほぼ同等）の広大な敷地を有しており、施設は大きく以下の4つのエリアで構成されている。



- 無人航空機エリア：国内最大級のネット付き飛行場や滑走路を備え、航空法の申請なしで試験が可能。
- インフラ点検・災害対応エリア：トンネル、橋梁、プラント、市街地など、実際の使用環境を再現した試験が可能。
- 水中・水上ロボットエリア：潜水や水害時を想定した試験が可能な屋内水槽や水没市街地フィールドを備えている。
- 開発基盤エリア：研究棟やレンタルラボ、各種試験機器を備えた、日々の研究開発の拠点。

【草津市関連企業の参画状況】

今回の視察において特筆すべきは、草津市に拠点を置く「株式会社人機一体」が、本施設を活用している点。同社は当初、施設内のレンタルラボに入居していたが、現在は南相馬市の復興工業団地内にあるインキュベーション施設へ移り、第2基地（工場）を構えて活動を拡大している。震災時にロボットが十分に機能しなかった教訓を踏まえ、廃炉作業やメンテナンス現場などで「本当に使えるロボット」の開発を目指している。廃炉関連の予算やニーズを捉えつつ、精密な操作性と重機のようなパワーを兼ね備えたロボットの実用化を進めている事例は、草津市のものづくり企業の可能性を象徴している。

【活用状況と成果】

- **利用動向**：利用の約66%がドローン関連であり、スタートアップ企業の利用も増加している。最近では宇宙関連企業の進出も相次いでいる。
- **産業集積**：震災以降、浜通り地域全体で新たに80社を超えるロボット関連事業者が進出しており、大きな産業振興につながっている。
- **人材育成**：地域の子どもたちを対象としたロボットプログラミング教室や出前授業が非常に好評で、次世代のエンジニア育成に寄与している。

【草津市における考察と今後の展望】

福島ロボットテストフィールドの取り組みから、草津市において参考にできる点。

- **特定分野に特化した実証環境の提供**：人機一体のように、都心部では困難な「大規模な実証」ができる環境が企業の成長を促している。草津市においても、市内企業の技術を社会実装につなげるための試験フィールドや、規制緩和（国家戦略特区等の活用）の検討が有効と考えられる。
- **スタートアップ支援と技術サポート**：施設には県ハイテクプラザの技術者が常駐し、試験データの取得方法などをサポートしている。市内のベンチャー企業に対し、設備提供だけでなく、伴走型の技術支援体制を整えることの重要性が示唆された。
- **教育を通じたシビックプライドの醸成**：地元の先端技術を活用したプログラミング教育は、子どもたちの将来の選択肢を広げると同時に、地域産業への誇りにもつながる。草津市でも市内企業の技術を教育現場に取り入れる連携が期待できる。

- **サプライチェーンの構築：** 進出企業と地元企業を繋ぐ交流事業（ロボテスフェスタ等）により、新たな取引が生まれている。市内外の企業が連携できるプラットフォームづくりが、産業集積の鍵となる。

今回の視察を通じ、先端技術の開発拠点が地域経済の活性化と次世代への投資の両面で極めて重要な役割を果たしていることを強く実感した。

◎南相馬市立中央図書館・南相馬市民情報交流センター 7月16日（木）12時～13時30分

当初の視察予定にはありませんでしたが、南相馬市で宿泊したホテルのすぐ横に図書館があるのを発見し、そのデザイン・雰囲気のすばらしさに引き込まれるように訪問。突然の訪問にも関わらず、司書の方は時間を割いて、いろいろ説明していただき、南相馬市民の方の温かさを感じた時間でもあった。



【概要】対応者：司書（読書企画係）

施設概要と建築的特徴

南相馬市立中央図書館は、JR常磐線「原ノ町駅」から徒歩1分の場所に位置し、市民情報交流センターとの複合施設となっている。

- **建築賞の受賞：** 平成21年（2009年）に開館し、平成25年（2013年）にはその優れたデザインから日本図書館協会建築賞を受賞。
- **開放的な空間：** 木の温かみを感じられる建物で、大きな吹き抜けがあり、日光が差し込む非常に明るく開放的な空間が特徴。
- **多様な座席：** 館内には**600席**の読書席が用意されており、半個室の読書席や、友人同士で会話しながら勉強できるテラス席など、利用者のニーズに合わせた多彩な居場所が提供されている。

コミュニティの拠点としての機能

単なる「本を借りる場所」ととどまらず、市民の交流を促進する仕掛けが随所に見られる。

- **「おはなしの蔵」と「子ども図書館」：** 1階には子ども向けの本を集めたエリアがあり、蔵のような形状をした「おはなしの蔵」では読み聞かせなどが行われている。



- **日常に溶け込む娯楽：**本棚の間に**ピアノ**が設置されておりコンサートが開催されるほか、**碁盤**や**チェス盤**が組み込まれたテーブルもあり、市民が自由に楽しめる工夫がされている。
- **カフェの併設：**館内には人気のカフェがあり、図書館と連携したイベントも開催されている。

震災復興と心の拠り所としての役割

東日本大震災後、この図書館は単なる公共施設を超えた重要な役割を担っている。

- **市民の心の安らぎ：**震災後、風景が一変した中で変わらずに灯る図書館の明かりは、帰還した住民にとって「癒やし」や「心の拠り所」となった。
- **震災・原発事故コーナー：**震災の記憶を風化させないため、関連資料を重点的に収集・展示する専用コーナーが設置されている。

利便性と運営体制

- **開館時間：**平日は**午後8時まで開館**しており、仕事帰りの利用や、ワーケーション等のPC作業にも対応した運営となっている。
- **先端サービス：**自分で貸出ができる「自動貸出機」や、車に乗ったまま本を返却できる「ドライブスルー用ブックポスト」が導入されている。
- **職員の熱意：**運営において「あれをしてはだめ」とルールを押し付けるのではなく、利用者を信頼する姿勢が居心地の良さを生んでいる。今回の視察においても、司書の方の丁寧な説明から、図書館運営に対する強い情熱が感じられた。

【所管】

南相馬市立中央図書館は、優れた建築ハードと、市民の生活や歴史に寄り添うソフト面の両立が成されている素晴らしい施設であった。建物は構造や雰囲気がジブリの世界に来たような感じを受ける居心地の良い空間だった。特に、震災という困難を乗り越え、市民が「ホッとできる場所」として明かりを灯し続ける姿勢は、今後の草津市における公共施設のあり方を考える上で、非常に示唆に富むものであった。

◎福島県南相馬市産業創造センター Zip Infrastructure (Zippar) 見学

7月16日（木）14時～16時



【概要】

草津市議会議員12名、市役所執行部4名、スマートシティ社会実装アドバイザーの土屋氏による合同視察団を編成し、福島県南相馬市「福島ロボットテストフィールド」内のZippar福島試験線を訪問した。開発元であるZip Infrastructure（株）から技術説明を受けたのち、参加者全員が実際に車両へ試乗（乗車定員12名）、自走式ロープウェイの走行性能・乗り心地・安全性を体感した。

【視察で得られた知見】

- ・実際の試乗を通じ、自動運転・自走方式による静粛で安定した走行を体感でき、市街地導入への技術的な信頼性を確認できた。
- ・既存モノレールの約1/5のコスト・工期で建設可能という点は、財政面での実現可能性を大きく後押しする材料となった。
- ・今回のテストコースは直線区間のみでの走行であったが、開発元の説明によれば、カーブ・分岐を自在に設計できる点が本来の特長であり、草津市内における新たなアクセス路線の選択肢として親和性がある。なお、南草津駅周辺は道路形状等の地形的条件から、必ずしも導入に適さない可能性があることも確認され、今後は他の候補エリアも含めた検討が必要である。
- ・Zip Infrastructure社からは、実証段階からのまちづくりへの期待について直接説明を受け、今後の協議に向けた関係構築の第一歩を築くことができた。
- ・執行部・議会・専門アドバイザーが一体となって現地を視察したことで、導入検討に向けた庁内外の認識共有が図られ、今後の具体的検討を進める体制が整った。

【今後の方向性】

今回の視察を踏まえ、草津市としてZipparの導入を前向きに検討していきたい。今後は、候補ルートも含めた具体的な調査や、Zip Infrastructure社・国の動向との情報連携を進め、草津市地域公共交通計画の議論の中に本格的に位置づけていくことが期待される。

4. 3日目（2026年7月17日）

◎山形県山形市シェルターインクルーシブプレイス コパル（山形市南部児童遊戯施設）
7月17日（金）9時30分～11時

【概要】

シェルターインクルーシブプレイス コパルは、「すべての子どもたちが『生きる力を育む、未来の遊び場』」をコンセプトに整備された大型児童遊戯施設である。施設は「生きる力」「インクルーシブ」「地域共生」の3つを柱に掲げ、年齢や障害の有無、国籍や家庭環境などに関わらず、誰もが安心して遊び、学び、交流できる環境づくりを進めている。



館内には大型遊戯空間をはじめ、木のトンネルやネット遊具、水遊びエリア、ものづくりスペース、図書コーナー、カフェなど、多様な過ごし方ができる空間が整備されている。また、授乳室や子育て相談室なども設置され、乳幼児から保護者まで安心して利用できる施設となっている。

【視察で得られた知見】

今回の視察で最も印象に残ったのは、遊具や建物ではなく、「人」を中心とした施設づくりであった。

館長からは、「目の前の人を笑顔にすること」を何よりも大切にしているという話があり、インクルーシブとは特別な支援ではなく、一人ひとりを尊重し、誰もが自然にそこにいてよいと思える環境をつくることだという考え方を学んだ。



館内の案内表示や遊具、休憩スペースなど、施設の至るところに見られる「多様性を当たり前と感じられる工夫」は、合同会社の様々な立場のメンバーが何度も議論を重ねながら形にしたものであり、理念が施設全体に浸透していることを実感した。

また、医療的ケア児をはじめ、様々な子どもたちが安心して利用できる環境が整えられているだけでなく、不登校やひきこもりなど社会とのつながりを失っていた若者がボランティアとして活動す

る中で、自信を取り戻し、社会復帰へとつながった事例も紹介いただいた。

この施設は単なる遊び場ではなく、人との出会いや役割を通じて人生が変わる「居場所」として機能していることが大きな特徴である。

さらに、利用者はこどもだけではなく保護者の滞在も多く、大人とこどもの比率がおおよそ1対1になる日もあるとのことであった。こどもだけが楽しむ施設ではなく、大人にとっても安心して過ごせる居場所となっていることが、施設全体の温かい雰囲気を生み出していると感じた。

【草津市への示唆】

近年は猛暑日が増加し、公園で安心して遊べる時間が限られていることから、天候に左右されずこどもたちが思い切り遊べる屋内施設の必要性は今後さらに高まると考えられる。

草津市においても、

- インクルーシブの理念を施設整備、運営に反映させること
- 医療的ケア児や障害のあるこどもを含め、誰もが自然に利用できる環境を整備すること
- こどもだけでなく保護者や地域住民も安心して集える居場所づくりを進めること
- 不登校やひきこもりの若者など、多様な人が役割を持ち、社会とつながることのできる場として公共施設を活用すること
- 猛暑や雨天時でも安心して遊べる屋内施設の整備を進めること

が重要であると感じた。

現在草津市ではロクハ公園の再整備が計画されているが、目指すべきは大型遊具の整備ではなく、こどもも大人も、障害の有無や家庭環境に関わらず、誰もが自然に集い、笑顔になり、「また来たい」と思える居場所を創出することである。

【所感】

今回の視察を通して、私が最も心を動かされたのは、館長が語られたインクルーシブの理念であった。

「目の前の人を笑顔にすることを大切にする。」

その言葉は、施設運営だけでなく、人づくり、組織づくり、そしてまちづくりにも通じる考え方であると感じ、深く共感した。

また、このような理念を持った施設や考え方を草津市に根付かせたいと強く感じた。

さらに、この理念はこどもの遊び場だけにとどまるものではなく、職員、議員、教育現場、市民一人ひとりが、「目の前の人を笑顔にする」「違いを認め合い、多様性を当たり前として受け入れる」という考え方を共有することができれば、草津市は今以上に温かく、魅力ある自治体へと成長していくと確信した。

そのためにも、施設整備の視察にとどまらず、草津市職員、議員、教育関係者が館長から直接インクルーシブの理念や施設づくりについて学ぶ機会を設け、草津市全体でその考え方を共有していくことが重要であると強く感じた。